

グリム童話「がちょう番の娘」をめぐる

— 転移・逆転移再考 —

氏 原 寛

Hiroshi UJIHARA

はじめに

昨年度、Jung の *Die Probleme der moderner Psychotherapie* (1929) をめぐって、転移・逆転移について考えた (氏原 1997)。その後少しばかり思うことがあり、かつ偶然「がちょう番の娘」について話す機会を与えられ、それがユング派のいう個性化のプロセスを表しているという考え (Klein 1991 Hinton 1991) に若干の疑問を感じたので、もう一度このテーマをとり上げたく思った。

個性化については、同じユング派でもチューリッヒ (たとえばマイヤー 1993, フォン フランツ 1990) とロンドン (フォーダム 1997) では意見が異なるようである。チューリッヒ学派が、個性化のプロセスは中年以降に始まる、それまではもっぱら自我の強化、つまり社会的にそれなりの立場を築くことが必要、とするのに対し、ロンドン学派は、誕生の直後から、乳幼児においてさえすでに個性化の兆がある、と主張しているからである。綿密な乳幼児観察に基づいているだけに、説得力がある。私自身は、チューリッヒ学派、とくにフォン フランツの個性化の概念には賛成できない。前掲書以外にも、彼女はその著作のあちこちに、個性化はエリートの仕事である、中年までにそれなりの社会的立場を作れないような (無能な) 人たちには望むべくもない、といったことを書き散らしている。彼女自身、以下のアレキサンドリアの学僧の話を用いているので、そのへんの事情は承知しているはずなのに、である。

ある学僧が、アレキサンドリアでは自分が一番神に近いと思っていた時、天使が現われて、「お前は二番目だ。一番目は別にいる」と言うのでそこまで案内してもらった。天使は彼をゴミゴミした下町に連れて行き、横町の小さな靴屋を指さして、「彼だ」と言う。学僧は早速店に入り問答を始めるのだが、靴屋は、「私には難しいことは何も分かりません。ただ家族を養うためにこうして一生懸命働いているのです」と答えた、というものである。フォン フランツの本を読んでいると、この学僧の姿が彼女と重なりあってくることが時々ある。

私自身は、生れた時から人間は個性化の道を歩んでいる、と考えている。たとえ本人には不本意であり周りにも迷惑をかけるだけの生き方をしている、それが彼または彼女にとつ

での個性化のプロセスと思うからである。フォン フランツは、個性化のプロセスをまるで最終の到達点のあるもののように考え、ユングは、そしておそらく彼女自身も、そこに至っていると錯覚しているのかもしれない。

ところで Klein は、「がちょう番の娘」を解釈するに当って、それが個性化のプロセスを表わすとした上で、錬金術の四段階との対比を試みている。黒化 (nigredo)、白化 (albedo)、赤化 (rubedo) である。そして娘の髪の色が最終段階の金、つまり到達点を示すという。この四段階をユングの前掲書にある心理治療における四段階説と、さらに私自身のカウンセリングの四段階説 (氏原 1993) とを比べるのが、本論文の目的である。

1 がちょう番のおんな

はじめにこの物語の全体を紹介するべきであるが、長いので要約するにとどめる。

王が死んで長らくの、年とった女王が美しい姫と一緒に住んでいた。姫は遠い国の王子との婚約が整い出発する。女王は至りつくせりの荷物の他に、侍女を一人とファラダという人語を話す馬をつける。そして自分の血を三滴しみこませたハンカチを与え、大事にしまっておくように言う。出発して一時間もすると、姫はのどが渇き、侍女に黄金の杯に水を汲んできてほしい、と言う。しかし侍女は勝手に飲めと言い、姫は流れに身をかがめて水を飲み、「情ない」と呟く。すると三滴の血が、「女王さまに分ったらその心臓は破裂するでしょう」と答える。間もなく再びのどの渇いたお姫さまは、再び侍女に水を汲んでくれるように言うが、同じことがくり返される。しかも地面に伏せて水を飲んだ折り、懐のハンカチを流れに落してしまう。そのため人を抑える力がなくなったのを見て、侍女は姫の衣裳を自分のそれととり換え、自分がファラダに乗って王子の城に着く。その上、一部始終を誰にも言わないことを姫に誓わせる。ファラダはみんな見ているが何もしない。王子は大喜びでにせの花嫁を迎え入れ、王さまだけが姫に気づく。しかし花嫁に言いくるめられ、がちょう番の小僧の手伝いをさせる。一方、花嫁は、ファラダの首を切って殺すことを王子に承諾させる。そのことを知った姫は殺し役にお金を払い、その首を街と田舎をつなぐ暗いトンネルの門の壁にかけよう、頼む。朝晩がちょうを連れて往復する道である。門を出る時姫が「可哀想なファラダ、こんな所にかけられて」と言うと、首が「可哀想なお姫さま、女王さまが知られたら、心臓ははりさけることでしょ」と答える。それからがちょうを原っぱに追い立てて、姫は髪をほぐして梳こうとする。小僧が黄金の髪をきらめきに魅せられて、二、三本とろうと寄ってくるが、姫は風を呼んで小僧の帽子を吹きとばす。そして小僧が帽子を追ってるうちにすっかり髪を整える。翌日も同じことが起こり、腹を立てた小僧はそのことを王さまにいつける。そこで王さまは、翌朝門の後に隠れて一部始終を見、姫が戻ってきた時そのわけを聞く。しかし姫は、それについては人に言わぬ誓いを立てているので言えない、と答える。王さまは、それではそのストーヴに言いなさい、と言って立ち去る。そこで姫はありったけの思いをストーヴに告白する。すると隠れて聞いていた王さまが現われて、姫に王女の衣裳を着せる。祝宴となり、王さまはにせの花嫁に、主人にとって代るような女はどうす

ればよいか、と尋ねる。にせの花嫁は、すっ裸にして内側に釘のつき出た樽に入れ、二頭の馬にひき回らせればよい、と答え、その通りになる。

2 母と娘—最初の状況

冒頭は男性のいない状態である。王と三人の息子型とは逆に、この話が、男性々をいかにして女性々のうちにとりこむか、を語るものであることが分る。しかも、遠い国にはすでに婚約者の王子さまがいる。男性と出会う第一歩は踏み出されている、と考えてよい。おそらくは母女王のはからいであろう。だから母親として、娘との別離の覚悟はほぼでき上っているのである。それとお姫さまの他者志向が重なっている。男性も女性も、いわゆる年頃になれば、一人では満たされない憧れの思いがつのってくる。それが、自分がそれ自体では不完全な欠けたる存在であることを思い知らせる。他者と出会うことなしに、この憧れの満たされることはないからである。

男性にしる女性にしる、おのれの男性々ないし女性々を身につけようとすれば、まずその社会の同性のおとなたちがどのようにふるまっているかを見、それらをモデルにしなければならぬ。次に、異性の前に立った時、おのずから内に生ずるプロセスがある。これは感覚的身体的プロセスに近いが、それを確かめおのれの間像の中に組み込んでゆかねばならない。思春期が「わが身体との出会い」(笠原 1977)の時と呼ばれるのは、そのためである。この姫の場合、未分化な母子一体感から他者志向へと動きつつある、という状況が示されている。

母女王は娘を嫁に出すのだから、ある程度分離の覚悟はできている。しかし、やはり不安は蔽いがたい。至れりつくせりの結婚支度は一見過保護を思わせる。Klein や Hinton はそれを否定的に考えているが、マレ (1984) は過保護のマイナス面は承知の上で、未分化な一体感が、人格の最も深いところで本人を支える基盤になりうることを指摘している。姫が最終的には本来の状態に戻るために、それが重要な要因であった、というのである。いずれにしる母女王が、花嫁を花婿に無事手渡すために侍女をつけるのは、娘がまだ一人では何もできないことを承知しているからである。さらに三滴の自分の血のついたハンカチを渡している。ペッテルハイム (1979) によれば、この話の別版では「三滴の血」という標題のものがあつた、このテーマの重要性が示唆されるという。事実三滴の血は、白雪姫や忠臣ヨハネスなど、グリムにつきもののテーマである。ノイマン (1955) によれば、それは生理、出産、授乳 (乳は血から生ずる、と考えられていた) を表わしている。しかし Klein たちは、授乳よりも破瓜の方がこの物語にふさわしいと述べている。いずれにせよ、女性が性的に成熟するために払うべき血の犠牲である。女性は成熟と共に身体的感覚的な自然のプロセスに従うべきこと、その際多かれ少なかれ自我を犠牲にしなければならない、ということである。だからこのハンカチを、嫁いでゆく娘に対する母による女性々の伝授、と考えることもできる。しかしマレ (前掲書) は、こうした間接的な方法でしか伝授できない母女王の弱さを指摘している。なお Klein は、白地に赤ということから、アルベド (白化) からルベド (赤化) への移行が含まれるとし、また白=女性、赤=男性とすれば、両者の統合がすでに仄めかされている、といっている。

ところでこのハンカチは、当然母親の分身としての意味を担っている。だからいわば移行対象なのである。この母と娘との結びつきは極めて強かったのであろう。それまで、その関わりを断ち切る男性原理、ロゴスが働いていなかったからである。娘にとって必要なことはすべて母親によって果たされてきた。その限り、娘は母親との共生関係にどっぷり浸って、自分自身を試し自分になるチャンスをほとんど与えられていなかったのであろう。嫁がせることと嫁ぐことは、その状態を打破する第一歩である。母の知恵と娘の他者志向性がようやく結びついたため、と思われる。しかし、一挙に関係が切れてしまうことは、母女王からすればさすがに危険にすぎる。そこでハンカチを頼りとして女性としての成熟を期待し、同時に母との分離を促した、ともいえる。

しかしかにかに他者志向性が高まっても、そこそこの自立なしには他者と関係を結ぶことは不可能である。だから王子さまの城への旅は、まさしくそのための試練の旅であった。お妃は、ひょっとしたらかなりの見通しをもって娘を旅立たせたのかもしれない。だからこそ自分が姫を届けることをせず、侍女をつけたのである。

お守り代りのハンカチを一種の移行対象と述べた。移行対象とは、子どもが親から分離してゆく時、親代りとして何らかの事物に固執することをさす（ウィニコット 1977）。それは非現実的な空想の産物であり、それが現実でないことは子ども自身が知っている。同時にそれは一つの心的現実であり、言語以前の母親とのつながりを多少とも再体験させるものである。娘が悲しむと、「お母さまの心臓が破裂する」とハンカチが答えるのは、娘にとっての自立の厳しさと同じくらいの、別離の苦しみを母親も同時に味わっている、ということであろう。

それらとの関連でもう一つ考えおきたいのが、ウィニコット（前掲書）の「二人いるから一人になれる」ということばである。これは、子どもは母親がいる時にのみ自分自身になれる、つまり、親のいることを忘れて積木や絵本に熱中できる、ということである。いわば「より大いなるもの」とのつながりを感じている時にのみ、われわれは孤独に堪えられる。もし母親がいなければ、淋しさのあまり子どもはもっぱら母親を探し求め、積木遊びどころではなくなるのである。

しかしこのことばは、「二人いても一人になれる」といい代えられもしなければならない。つまり子どもが母親を忘れ母親から分離（自立でもある）しようとする時、母親がそれを歓迎しなければならないのである。しばしば母親はこの分離体験を拒む。したがって子どもは、自立することが母を捨てるという罪悪感を負わされやすくなる。すでに述べたように、とくに思春期には、男女を問わず他者志向性が強くなる。とくに同世代の異性との結びつきを通して、母子のつながりから逃れようとする。それが当然の発達筋道である。だから母親との共生関係は破られねばならない。しかしそれには、しばしば母親からする抵抗の大きいことはすでに述べた。

つまり子どもは、自立のために二人いなければならない。二人いるから一人になれるのだからである。しかし、十分に一人でありえなければ母親に呑みこまれる怖れがある。そこで多かれ少なかれ母親から離れなければならない。しかし、母親とのつながりが感じられなくなると子どもは孤立する。要するに、二人いて一人になれぬ時には共生的に呑みこまれ、二人いて一人でありすぎれば孤立して見捨てられる。まさに進退きわまった状況なのである。

母子共々のこのアンビバレントな状況を、「まあまあ母親」なら何とか切り抜ける、というのがウィニコットの意見である。しかしこのテーマは、もともとは乳幼児と母との観察から得られた知見であるが、誰しもにおそらくは生涯を通じての課題である。依存と自立は相補的な関係にあり、決して相反的なものではない。だからこそウィニコットは、「依存のない自立は孤立にすぎない」ともいっている。移行対象とは、そうした自立と依存との微妙な関わりを解明するための一つの構成概念である。Klein や Hinton は、ここの所を見落している。だから自立と依存との逆説的な相補性に気づかず、ひたすら依存を克服することを自立と考えているようである。

次が物言う馬ファラダである。これがハンカチと同じ移行対象的な意味をもっているのは間違いない。娘が声をかけるとそのつど、「お母さまがお知りになったら……」と、ハンカチと同じ答えをするからである。馬は本能的、とくに性的自己主張的な心的エネルギーを表わすという (Klein 前掲書)。しかしそれが物を言うのは、本能的なものが人間の領域につながるからである。渡り鳥が毎年誤ることなく同じ渡りの地に着いたり、木つつきが間違いなく虫の隠れた樹幹をつつくことなど、本能的な知恵には理論的な知識の及びもつかぬ不思議がある。もともと、与えられた状況が少し変わるだけで、もう環境に対応できない信じられない程の愚かさもあるのだが。

ファラダは本能的な知恵である。賢し^{さか}らな人間の思いもよらぬ知恵を秘めている。それらはすべて、自然なままに体に備わっている。母女王が娘に与えた三滴の血の意味も、それが生物的なプロセスであるだけに、この馬には分りすぎる程分っているはずである。当然姫の未熟さと、成熟するためには厳しい試練の必要なことも。だから姫が侍女に虐げられているのを見て、十分に腹におさめるだけで何も言わない。

ジェームズ・ラング説というのがある。悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだとする考えである。これは、頭で判断するより前に感覚的身体的な状況判断があり、それに対して感覚的身体的レベルでまず反応が生じる。それを確かめることによって、自分(意識)にとつてのその意味が分り、悲しくなるというのである。難しくいえば識閥下知覚ということになる。なかば以上無意識の、感覚的直観的な判断機能としてもよい。フォン フランツ (1979) によれば、おとぎ話にはさまざまな動物が出てくるが、一つだけ確かなのは、彼らの忠告に従えばまず間違いがない、ということである。それらが人類出現以来、あるいはそれ以前からの、蓄積された本能的な知恵に発しているからである。

その意味でファラダは、ハンカチ以上に母女王の分身といえる。そして姫の苦しい試練をひたすら見守るのである。もちろん、姫を手放したお妃の苦悩も十分理解している。しかし姫の苦しみは、実は姫を嫁に出す前のお妃には予想されていた。それがないと姫の女性的成熟はありえないからである。他者志向に従って他者と出会わなければならない。ファラダはいわば、お妃の代りに姫の成熟のプロセスを見守る役割を与えられていた。与えられた課題に姫が自分の力でどう対応してゆくかが問題であり、もはやお妃もファラダも姫の代りに事をひき受けることができないのである。

侍女が母女王の、したがって姫の影だとする Klein や Hinton の考えに反対する理由はない。母と娘は奉仕されるのが当たり前とと思っていた。生れながらの王族であったのであろう。しかし侍女は仕える側にいる。王族たちの愛や優しさはお互いの間に限られていて、召

使いにまで及ぶことはめつたにない。少なくとも同じ人間として関わろうとはしない。せいぜい飼い犬や飼い猫に対する親しみの域を出ない。仕える側に多かれ少なかれルサンチマンの蓄積していることなど、思ってもみないのである。傲慢、権力志向などが王族たちの悪徳なのだが、母と娘はそれに気づかず、二人の愛情を確かめあうだけで、むしろ自分たちを心優しい人間と思こんでいる節がある。

影はそれと気づくことがないと、周りの人に投影される。お妃と姫は、こうして知らず知らずの内に召使いや従者を傷つけている。ただし気がついてたからといって、影を形作っている心的要素がなくなるわけではない。今まで、おそらく自分のものとしてうけ入れられなかったからこそ、影の領域に迫りやられていたものである。それが見えてきた。それにどう対応するかこそが誰しもの課題である。そして影の要素をそこそこにうけ入れてはじめて、他者の似たようなありようが見えてきて、ある程度寛容になれる。もちろん影の要素は躓きの石である。何とか克服したいと思う。が、なかなかそれができない。しかしそのことの必然性が理解されると共に（たとえばわれわれは、しばしば不本意な身体的欲求を満たさねばならない）、まあ、よいか、あるいは、仕方がないか、といったある種の諦観と共にうけ入れることが可能になる。時には愚かさを承知の上で、それを楽しむことさえできる（たとえば移行対象と遊ぶこと）。それによって全体としての自分の傷つくことが少なくなるからである。だから自分の影に気づくことは、他人の影に気づくことでもある。しかしその場合は、ひと事とは思えぬ共感が伴う。気づいていない場合、それはもつばら投影されて相手の欠点として映り、対人関係を著しく阻害する。本人の“善意”にもかかわらず、である。

「ヘンゼルとグレーテル」のグレーテルは魔女の悪企みをいち早く見抜き、逆に魔女を欺いて殺すことに成功した。これは、魔女の悪計を見破るだけの悪さがグレーテルの身に備っていたからである。この物語の無邪気なお姫さまには思いもよらないことである。だから姫は侍女の悪企みにまったく気づいていない。そして王子さまのお城への途中で、ものの見事に役割を逆転させられてしまう。

これを影が主人公を乗とった、ということもできる。姫や侍女は二人して一人の女性の両面を表わし、今まで無邪気な一面を表わしていた姫が、悪賢い侍女としての一面を露わに、王子さまのもとに赴くのである。衣裳から何から何までとり代えるのは、ペルソナによって内実を蔽うためであり、にせの花嫁を歓迎する王子にも、真実を見破る力のまだないことを示している。しかし無邪気な姫にとって、これは思いがけない召使いの反逆であり、これに対してなす術をまったく見だせていない。一旦城を出て母女王と離れると、右も左も分らないのである。黄金の杯に水を汲んできてくれ、と言うのも、母女王によってすべて欲する時に無条件に与えられてきた名残がある。召使いに拒否された時、姫ははじめて“他者”の容易ならぬ現実に直面する。白馬に跨った王子さまがにこやかに迎えに来る、などといったものではないのである。やむなく流れた身をかがめ、さらには大地に腹ばいになって流れから水を飲まねばならない。

これが謙譲の第一歩である。今まで、卑しいものと決めつけていた侍女の言うままになるのだから。さらに大地に身を投げ出すことが、ファラダの背の、足の地につかぬ状態から、母なる大地、自然の懐に身を任せることになる。母女王を超えた母性との出会いである。そして大事なハンカチをそこで失ってしまう。これはお守り—移行対象—の喪失であり、その

結果一ぺんに力を失くしてしまったのは領ける。そのため侍女のいいなりになる。しかしこの旅で姫の果すべきことは、影の存在に気づくことである。すでに述べた他者志向とは、母子一体の共生世界から現実世界への出立を促すものでもある。Hinton（前掲書）は、姫のしょっ中感じる渴きを、自分自身を生きていないしるしとし、本来の自分を取り戻そうとする渴きだ、と述べている。

ここで姫は侍女によって、起こったことを誰にも言わぬことを誓わせられる。好むと好まざるにかかわらず、侍女と秘密を共有したのである。秘密には二重の意味がある。一つは、誰に何を秘密にするかによって、われわれは相手との距離を保つ。それによって、相手に呑みこまれない自分自身の立場を守るのである。もう一つは、誰にもうち明けられない秘密は、しばしば自己疎外の原因となる。つまり共同社会の一員として仲間に入られることができなくなる。その意味で秘密をもつことはタブーであり、一種の穢れである。侍女との秘密の共有は、侍女と仲間になることであり、その邪しさ、穢れの取りこみでもある。この穢れを共同社会に明かさぬ限り、穢れの浄められることはない（社会復帰できない）。侍女からいえば、こうした影を抑えこみ、上（ペルソナ）だけで自分の立場を支えようとするのである。いずれにしるこの時点で、姫は母の守りを失い、大地にひれ伏し、かつ母に対する秘密を持つことになった。Klein（前掲書）がこの段階をニグレド（黒化）の段階としているのは、思いつきである。

こうして二人は王子さまのお城に着く。この物語が、男性原理＝ロゴスを取り入れるプロセスを描いているとすれば、姫はようやくロゴスの領域にたどりついたわけである。ここで王子さまは実に無邪気ににせの花嫁を歓迎する。王さまだけが姫の存在に気づき何かを感じるのだが、にせの花嫁に言いくるめられ、がちょう番の小僧の手伝いをさせることにする。ここでHintonとKleinががちょうについて述べていることを紹介しておく。

まずそれは愚かである。それを世話することでおのれの思考機能を育むことになる。飛びもせず泳ぎもせず地上を歩くことは、現実的な立場を表わす。アプロディーテの聖なる鳥でありエロスの意味あいをもつ。世界創造の黄金の卵を生む。生涯一夫一婦と考えられ夫婦愛の象徴である。長い首がファルロスを連想させる。エジプトでは再生と不死の観念と結びついていた。野生の雁が渡りに示す内的な方向性は個性化の象徴である、など。

ここでファラダの首が胴体から切り離される。お腹におさめたものが口について出るのを、にせの花嫁が怖れたためである。影の花嫁は、今やおのれの影（影の影）の明るみに出るのを怖れている。内容のないペルソナだけの花嫁として生きるためには、である。本当の姫の方は、みずからお金を出して、その首を朝夕がちょうを追って通るトンネルの門の壁にかけてくれるよう、首切り役人に頼む。このトンネルを街と田舎、意識と無意識、男性々と女性々の接点だとする、Hintonの解釈がある。

ファラダが母女王の分身であることはすでに述べた。姫は今ようやくそれに語りかけることができる。そしてファラダも答えるのである。姫はかつての未分化な母子一体感にまどろんでいたように、つまり何もしなくてもすべて叶えられていた時とは異なり、自ら語りかける。そのための手配も自ら行う。そしてファラダ、母の分身に語りかける。このつながりが姫を強くする。まさに二人いる（依存できている）から一人（自立）を感じ、独りいて（自立して）二人を感じ（依存できる）ている。先の、近寄れば呑みこまれ、離れれば見捨てら

れる状態の逆の状況が生じているのである。ハンカチやファラダが、姫が途方にくれる時つねに「お姫さま」と呼びかけるのは、姫のアイデンティティ、たとえばちよう番の女に貶しめられ誰も本当の自分を知らなくても、自分は自分、すなわち紛れもない王女であることを思い出させていること、もつけ加えておきたい。

さて小僧である。これは姫が最初に接触する男性である。未熟な姫でも（しかし旅の前の姫とは明らかに違う）あしらせる程度の男性々といつてよい。または、この程度の未熟な男性がやっと彼女の心の中に動きはじめた、といつてもよい。しかし姫の黄金の髪の毛を奪おうと寄ってくるのだから、すでに性々が芽生えている。姫がこれ見よがしに髪をほどくのは、それに対する反応＝誘惑の可能性がある。マレ（前掲書）はハイネの詩を引いて、ここでの姫とローライとの親近性をうんぬんしている。他者志向性が定められた方向を見失うと、思春期の女性の場合、乱脈な異性関係に発展することがある（Hinton）ともいう。しかし姫は小僧に髪を取らせない。風力で小僧の帽子を吹きとばし、小僧を寄せつけないからである。

ユングが心理治療の段階を四つに分けたことは、昨年度紹介した（氏原1997）。そしてその第二段階が解明の時期に当る。（精神）分析の段階なのである（Kleinはアルベド（白化）の段階としている）。これは意識的な告白レベルだけでは不十分な患者に、無意識部分を解明することによって、感情機能を甦らせようとする試みである。姫が侍女の影をとりこんだことは、彼女の感受性を豊かにした。影とは感情・感覚レベルの体感を感じさせなくすることが多いからである。しかしだからといって、誰彼なしに関係をもとうとすることが必ずしも望ましくないことは、すでに述べた。

この物語でいえば、一般的な他者志向性を特定の他者に限定する必要がある。それによって、おのれの置かれた個人的状況を通してしか現われてこない内的プロセスが現前する。ある種の衝動が自然のものだからといって、その具体化をそのままはかることは、しばしば方向感の喪失を伴うし、少なくとも衝動に負けた無力感、挫折感を生ぜしめる。姫が小僧との間にくり広げる状況は、姫の一段の成熟を表わしている。髪を梳り整えることは、明らかに成熟した女性のたしなみ、そのペルソナ作りである。ただしペルソナにも二重の意味がある。一つは、にせの花嫁のペルソナ、真実を蔽いかくすためのものである。もう一つは、ここでの姫のように、真実を生きるためにはペルソナを通すしかないことである。少し粗っぽい、ペルソナを社会的役割に近い意味にとれば分かりやすいと思う。

だから感情機能が回復し、エロス＝関係性志向が高まったからといって、誰彼なしに関わろうとするのは危険である。誰といつどのように関わるかを定めるためには、情熱もさることながら、現実的な配慮が要る。お互いがどんな関係、どんな役割を通してつながっているのかを確かめねばならない。たとえばユングもフロイトも、近親相姦願望をどのように克服するかが、その後の人格形成に決定的な意味をもつことを指摘している。自然な感情ないし衝動を、相互の社会的関係を通して具体化する、ということである。確かに姫と小僧は女性と男性であり、すでに性的な色合いの入っていることはすでに述べた。しかし二人は性的に結ばれるような関係に立っていない。それぞれのペルソナがそのような結びつきを許さないからである。姫は成長した娘らしく髪を整え、小僧は大事な帽子を被ることによって、それぞれのペルソナを作りあげる。なれなれしく髪の毛を奪わせてはならないのである。

ここで姫が、小僧の帽子を飛ばすために風を使う所が興味深い。風は方向性を表わす。しかし風自体は目に見えず、風を受けた事物によってその存在および方向性が分かるにすぎない。それは、無意識が直接意識されることがなく、象徴としての外的事物に投影され、その限り間接的に意識されるのと同じである。無意識は意識を通してしか意識されない。ここで風は、その現実世界に及ぼしている影響—小僧の帽子をコロコロ転がす—を通してしか見えない。姫は旅の苦難を通して、どうやら無意識から発するエネルギーを感じとる力を身につけたようである。それは、母女王の三滴の血やファラダの犠牲を通して、女性の中の自然な身体的な、したがってしばしば意識されないままのプロセスに、気づきつつあることを示している。ある程度性的に触発されながら、女性としての本能的な構えがあえて小僧を近づけさせないのである。

そこで小僧は、事の次第を王さまにいつける。小僧には手に負えないほどに成熟した姫を、然るべき男性につないだのである。一部始終をひそかに調べた後、王さまはどういう事情であったのかを姫に確かめる。しかし姫は、先に侍女との間に行った誓いのために何も言わない。誰に何を秘密にするかが相手との距離を保ち、自分の立場を守るのに役立つことはすでに述べた。信頼した者同士の間には秘密があってはならないのというのは、未熟なセンチメンタリズムにすぎない。だからここで姫は、立場こそ違え対等の人間として王に物を言っているのである。そこで王は、思っていることをストーブ（爐あるいはかまど）に向かって言ってみたら、と提案する。

Klein はこれをルベド（赤化）の段階とする。腹におさめた感情をありったけ吐き出すことだからである。彼女の分類では城への旅がニグレド（黒化）で、ファラダの死がアルベド（白化）になる。しかし感情とは、一度吐き出せばすむものではない。

私自身の定義（氏原 1993）によれば、感情とは経験（対象？）を自分との関わりでうけとめた時、おのずから生じてくる意識状態であるし、無意識を意識の側から説明するのは、小僧の転がっている帽子が風なのか帽子なのかを論ずる、同義反覆の傾向に堕ししやすい。ユングは感情機能を、思考機能と共に判断機能としている。それは対象の、個人としての自分に対してもつ意味ないし価値を測る働きなのである。ところで彼は、心理治療の第二段階として解明の段階をあげ、そこではフロイトの方法が適用される、と述べている。われわれには身体的感覚的レベルの意識がある。母女王のハンカチやファラダが姫に伝えようとしていたことである。姫が大地に腹ばいになった時、感じていたのもそれである。多くは全身的で未分化であり、何となく感じているというレベルにとどまっている。わけが分からないということでは、無意識といってもよいし、感じているのだからすでに意識されている、といってもよい面がある。

共感のプロセスとは、カウンセラーの感性を通して、以上述べたクライアントのあいまいな感覚＝無意識をほり起こす試みである。転移・逆転移の重要性は、カウンセラーとクライアントの間にまず本物の深い人間関係のでき上ることである。それは「いま・ここ」の相互作用を通して、多かれ少なかれ情動的な色あいをおびる。それを幼児期体験に重ねることが大切なのである。解釈が適切であれば効果があるとは必ずしもいえない場合があるのではないか。たとえばフロイトのドラの証例（1969）は、以上のようなお互いに感じあうプロセスがなく、まさしく外科手術のごとく解釈が与えられている。フロイト自身、このケースでは転

移・逆転移への配慮が足らなかった、と述べているのだが、嘔吐感をフェラチオ願望として説明されたのでは、思春期の少女であるドラにはとても受け入れられるようなものではない。分析が中断したのも当然と思われる。

ところが、必ずしも無意識の堀りおこしをみざさなくても、治療的に意味深い状況の生ずることがある。それがユングのいう第一の告白段階である。それだけでもかなりのカタルシス効果をもつ。先に秘密のもつ二つの側面について述べた。自分だけの秘密をもつことが、時に耐えがたい重荷になることがある。たとえば「王さまの耳はロバの耳」の理髪師は、柳の木に秘密をうち明けることで苦しみから救われた。キューブラー・ロス (19) の臨死患者との最初の面接相手だった少女は、「今まで本当に聞いてほしかった、話したかったのに誰も聞いてくれなかったそのことを、先生がはじめて尋ねてくれた」と涙を流す。

だから姫がストーヴに向って話すのは、まずカタルシス効果が大きかったと思われる。くり返し述べてきたように、秘密には自らを世間に閉ざす働きがある。たとえストーヴであれ真剣に告白することは、ストーヴを通して世界とつながろうとすることである。しかもストーヴの向うには王さまがいる。今や成熟した姫が、かつての母子未分化なままの子どもではなく、“おとな”として事の異常を嘆いているのである。これはストーヴへの語りかけなのであるが、内容は理非曲直を正したいという、父性＝ロゴスへの呼びかけである。王さまはみずからストーヴの背後に隠れたのであるが、実は姫が呼びとどめたといえなくもない。母への思いもあるが、それについては後にふれる。

それとの関連でもう一つ。未熟な者には未熟な者が対応する。先に、女性は文化的なものをとり入れるだけでなく、男性的なものに触発される内的プロセスを通して女性として成熟する、と述べた。男性もまた同じである。お互いはお互いにとって未熟な存在である。こちらがどれだけ相手によって動かされているかによって、相手の動き方も変わる。相手が深まることによって自分も深まり、逆も真である。フロイトと症例ドラの間にはこの相互作用がない。感覚レベルの意識（それとても性的願望とわり切ってしまうフロイトの考え方は、単純すぎる）が、その意味を確かめることなく（つまり感情レベルを仲介することなく）、一挙に知的解釈の対象になっている。緻密な論理に基づいているだけに、ドラはだんだん追いつめられていったような気がする。いずれにせよ人間関係は、相手にどれだけ自己を開示するかによって浅くも深くもなる。浅いだけの数多くの関係をもつことが、関係の意味を明らかにすることは決してない。ドラの症例にはこの関係性が欠けているのである。

姫の前にまず現われた男性は、がちょう番の小僧であった。その時点では、姫にふさわしい相手だったのである。しかし姫の成長が、小僧には手に負えなくなる。そこでより成熟した男性として王が現われたのである。王は外界の法と秩序を保つ。真相を知って姫を外の世界に導き出し、ふさわしい衣裳（ペルソナ）をつけさせる。姫の美しさは隠しようもない。

ところで囲いのあるストーヴは、そのまま秘密の洩れることのない秘密の器、と考えられる。これを心理治療の場になぞらえられるかもしれない。Klein はストーヴは女性の秘儀の変容の場という。これを母の器とすれば、三滴の血やファラダの首と違って、はじめて母が娘の声に耳を傾けることになる。秘密はやたらと人にうち明けるものではない。秘密には何がしかの疎外感、したがってタブーないし穢れの感じがつきまとうからである。秘密を聞く時には、相手と穢れを共にする覚悟が要る。それは、自分がクライアントと同じ経験をした

場合、どのように動かされるのかについての、むしろ受動的なプロセスである。受苦といってもよい。その時、告白の場は変容の場たりうる。しかし聞き手にその用意のない時、語り手は多かれ少なかれ傷つかねばならない。ある30才の女性は、幼児期のレイプ体験をとうとう母親に話すことができた。しかし母親は、「あんたそんなこと気にしてたの」と笑い飛ばし、女性は直後に自死された。あるカウンセラーは、中3の時知りあいの大学生たちにレイプされたという高校生に、「あなたは身も心も汚されていない」と言うことによって、“模範的に”みずから共に穢れることを避けた。

おしまいににせの花嫁の末路である。ストーヴが姫の秘密にたじろがず、それを抱えて洩らさないということは、侍女との秘密に穢された姫の浄めのプロセスに当る。Klein がそれを女性の変容の秘儀とするのは、その意味で領ける。それをいい代えれば、おのれの中の母性的機能に気づくことでもある。だからこのストーヴを、肯定的な母親イメージとすることができる。一方、にせの花嫁の閉じこめられた樽も、包みこむということでは母性的なのである。しかしそれは、内側に針の出たもので、中に入った者は母による死の抱擁を受けねばならない。これも生み育むストーヴの母に対して、母性、死の母のイメージを呼びおこす。おそらく母なるものは、身体的感覺的なものをうけ入れない侍女のように、ペルソナ、内実の伴わぬ表面的なありようだけで生きる者を許せないのであろう。身体的なものをうけ入れることで、女性としての成熟を果たした姫に、ふさわしいペルソナの与えられるのと好対照である。

以上、主に Klein と Hinton の考えによりながら、「がちょう番のおんな」について考察した。あわせてユングのいう、告白、解明、教育、変容の各段階と、Klein の黒化、白化、赤化の段階を比べてみた。Klein の第四段階は、姫の黄金の髪の示す最終的到達段階である。しかし以上みてきたように、両者の間にはかなりのズレがある。転移・逆転移についても、Klein は何もいっていない。ユングについていえば、その変容の段階がこの物語では必ずしも明らかに語られていない。しかし実は、この物語のはじめから終りまでが、全体として変容のプロセスを示している、と考えておきたい。たとえば解明の段階において、ユングはフロイトの方法論をうんぬんしているけれども、ドラに対するフロイトのやり方を考えていたのならば、それを越えた変容の段階がすでにそこに含まれている。いずれにしても、ある時期、つまり母子分離期の女性々の発達の段階がみごとに描き出されていることは間違いない。しかしこれを個性化のプロセスとは考えにくい。個性化のプロセスには到達点がないし、とくにこの話では、未熟な王子さまとの“対決”が残された課題と思えるからである。

参考文献

- ベッテルハイム、B (波多野・乾訳) 1979「昔話の魔力」評論社
 フォン フランツ M. L. (氏原寛訳) 1979「おとぎ話の心理学」創元社
 フォン フランツ、M. L. (後藤・鳥山訳) 1990「おとぎ話と個性化」人文書院
 フォーダム、M. (氏原・越智訳) 1997「ユング派の心理療法」誠信書房

氏 原 寛

- フロイト, S. (細木・飯田訳) 1969 あるヒステリーの分析の断片「フロイト著作集 5」人文書院
- Hinton, L. "The goose girl" Puella and transformation 1991 in Stein, M. & Corbett, L. (eds.) *Psyche's stories* Chiron Publication 141-153
- Jung, C. G. 1929 *Die Probleme der modernen Psychotherapie* GW 16 Walter Verlag 57-81
- 笠原嘉 1977 「青年期」中央公論社
- Klein, L. "The goose girl" Images of individuation 1991 in Stein, M. & Corbett, L. (eds.) *Chiron Publication* 65-90
- キューブラー・ロス (川口正吉訳) 1975 「死ぬ瞬間」読売新聞社
- マレ (小川真一訳) 1984 「〈子ども〉の発見」みすず書房
- マイヤー, C (氏原寛訳) 1993 「個性化の過程」創元社
- Neumann, E. *Great Mother* (trans by Mannheim, R.) 1955 Princeton Univ. Press
- 氏原寛 1993 「意識の場理論と心理臨床」誠信書房
- ウイニコット, D. (牛島定信訳) 1977 「精神発達の精神分析理論」岩崎学術出版